報告要旨　　2007 年 7 月 21 日　日本国際経済学会関東支部大会
（於）東北大学

企業グローバル戦略と国際分業
―協調分業・フラグメンテーション、ビジネス・アーキテクチャ、カタストロフィー―

村中　均（国際基督教大学社会科学研究所助手）
mhitoshi@nt.icu.ac.jp

IT ディジタル化の進展、そして貿易・投資の自由化促進による世界的な市場の開放と拡大による経済のグローバル化は進展している。その中で企業は多国籍度を深化させグローバル・ビジネス（生産・流通）・ネットワークを構築している。現在では全世界の貿易量の過半が多国籍企業によって担われており、企業グローバル戦略またはグローバル・ビジネス・ネットワークすなわち企業の存在を無視して、生産・貿易（国際分業）パターンを語ることはできない。さらにこの現象はマクロレベルでは地域経済統合、産業集積・産業クラスターと関連しており、その形成から生じる利益やその高度化の方向性や在り方が論点となる。多国籍企業がキープレーヤーであるグローバリゼーションの動きは今後不可逆的なものであろうし、現象自体から企業の理論と国際貿易理論との融合が求められているといえる。

この融合というものはなかなか難しい。このことはそれぞれの「学」としての根幹に関わっている。まず企業の行動側面に分析の視点・単位を置く「国際ビジネス」に対して、「国際経済」は国民経済にそれを置いている。企業は生産要素を経営資源としてパッケージング化し国境を越えて移動させ、一方、伝統的な国際経済は国民経済内で経済活動は完結し、最終財が国民経済間を「貿易」により相互結合することであり、生産要素の移動性、片や、生産要素の不移動性という理論前提が相容れない。しかし、現実は企業グローバル戦略と国際分業が連動している。したがってこれらを関連させた理論モデルを構築することは学問的には国際ビジネスと国際経済の狭間を分析することであり、グローバリゼーション研究の最先端にある。

本研究では、特に 1990 年代を通して産業間貿易から産業内貿易に急激にシフトした東アジアの生産・貿易構造の大転換を説明する動学理論モデルを、企業の視点すなわち価値連鎖を始点とし、協調分業ビジネスモデルやフラグメンテーション理論で問題となるグローバル戦略における価値連鎖の特化と調整の問題を「ビジネス・アーキテクチャ」、そして「カタストロフィー」を介在させ、雁行形態・PLC という既存の枠組と比較検討し、提示する。またグローバル・ビジネス時代の「新しい」I 型と M 型という国際分業パターン・形成メカニズムを概念的に明らかにする。

詳細は、拙著「カタストロフィーによる国際貿易・海外直接投資理論―ビジネス・アーキテクチャ競争優位パターンの転換―（上）（下）」『世界経済評論』51(4), pp.41-45, 51(5), pp.39-51, 2007 年を参照されたい。